Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

小説半導体戦争（十）

１０　極秘協定

１

杉田望

そのレストランは理恵がワシントンで泊まっているホテルから、数ブロックほど歩いたジョージタウン通りにあった。つい先ほど二回目のショータイムが終ったばかりで、舞台から離れた奥の席は割合静かだ。

三人の女がテーブルを囲んで座っている。メニューをのぞきこみながらメインディッシュを熱心に選んでいるのは裕美である。ワインを選んでいるのはシオリだ。女たちの果てしないグルメをめぐるお喋りが終わり、結局はシーフードサラダとペッパーステーキ、それに赤ワイン。無難な線に落ち着いた。

理恵がアメリカ大陸の大地を踏んでから二週間あまりが過ぎている。二日後には、サンフランシスコを経由して帰国する予定になっていた。

サンフランシスコから直接ワシントンに入った裕美は忙しく米国政府関係者の間をかけずりまわっていた。その裕美も来週には帰国する予定だ。ちょうど、シオリは公務出張でワシントンに滞在していた。こうして三人が顔を合わせるのはサンフランシスコ以来のことだ。とりとめもないお喋りが一段落すると三人の会話が急に途絶えた。

モトラム社が倒産して以降、日米関係はこの三ヶ月の間に劇的な変化をみせている。アメリカ滞在中、日米両国は厳しい対立の関係にあることを理恵は改めて知らされた。モトラム社の倒産を契機に顕在化した日米の対

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

立は、今や経済の枠組みを超えて政治や文化のレベルにまで拡大している。

理恵は背後でうごめく巨大な力の存在を感じとっている。一人で立ち向かうには、厄介な相手のように思える。三人が協力しあうことができないものか、そのことを理恵は考えていた。だが、この場合、三人の関係は微妙だった。

微妙というのは、ことにシオリと裕美との関係だ。昔から二人の関係はとこかギクシャクするところがある。大学を卒業してからはかたや官僚、一方は新聞記者という立場。とくにシオリは、職務に忠実というのか、公私のけじめをハッキリとさせる質(たち)で、どうにも融通かきかないところがある。まして相手が新聞記者とあってはなおさらである。

裕美はシオリとは対照的で、仕事のためならばと、物事を割り切って考える。

二人の間に仕事のことを絡ませると、いつもろくなことは起こらないのだ。理恵が二人を相手にする場合、当りさわりのない世間話に流れてしまうのは、そのためなのだ。女であるがゆえなのか。仕事のことで情報交換のネットワークを築くことが、いかに難しいことであるかを、理恵は痛感させられている。

裕美は先ほどから落ち着かぬようすだ。せわしなく煙草を吸っている。裕美はアメリカを発つ前に原稿を東京に送ることを高岡に約束している。取材は思わしくないようで、まだ手元には充分な材料が揃っていない。少し焦りを感じているようだ。

ロバーツ教授と理恵が話しか内容に、裕美が興味を抱いていること、それは理恵にもわかっている。裕美はそのタイミングを計(はか)っているような素振りだ。例の論文を手がかりに事件を追いかけてきた裕美にすれば、そのことに関心を持つのは当然のことだ。まして裕美は教授に対して濃厚な疑念を抱いているのだ。もちろん、ロバーツ教授がオフレコを前提に　理恵のインタビューに応じていることは、裕美も知っていた。

シオリは仕事に忙殺されているらしく、ひどく疲れた顔をしている。今日も大使館で対応策を協議する会議が持たれたのだが、さしたる議論もないままに会議は終った。本省からは米側と司法取引をやるための条件を探

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

れと、相も変わらぬ訓令が届いている。シオリの顔にはいつもの生彩はない。

ころあいを見はからって、裕美がロバーツ教授に対するインタビューの結果がどうだったかを聞いた。裕美のあけすけなものの聞き方に、理恵は少しばかり意地の悪い気分になっていた。

「あまりたいした話は出なかったわ」

「けち」

裕美のそのひとことに、三人はどっと笑った。場が少し和(なご)んだように思える。

だが、理恵は言葉につまった。理恵は混乱をきたしていた。

教授と会って、ハッキリしたこともあるが、考えはまとまりを欠き、空転を続けているのだ。だから裕美の質問にどう答えるべきか、正直いって、理恵は困ってしまう。理恵の脳裏にロバーツ教授とやりとりをした場面が浮かんできた。

教授か別れ際にいったあの言葉も気になることだ。あれは理恵には恫喝(どうかつ)にも聞こえた。いったい、このとてつもない事件のプロットを考えた人間は誰か。理恵はロバーツ教授と会ってからとというもの、そのことをずうっと考えてきた。

「正直いってわからないことだらけ」

理恵の言葉にシオリが深くうなずいた。理恵の脳裏には考えがまとまらないままに次々に疑問が湧き上がってくる。

ことは半導体をめぐる投資摩擦に起因した事件だった。しかし事件は意外な展開をみせている。反日の動きは依然鎮静していない。それどころか、半導体から自動車や家電製品にまで日本企業は労働攻勢に曝(さら)され、日本製品をボイコットする反日の動きは全国的な広がりをみせている。日本企業の大半はことを荒立てたくないため沈黙しているが、日本叩きはいよいよ凄みが加わっている。日本の企業を米国から排除する作戦は見事に成功したということなのか。こうしたなかで米国に見切りをつけ、米国から撤退する企業が相次いでいる。

両国の関係は戦後では最悪の状態におかれている。マスコミや評論家た

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

ちは、そういって騒ぎ立てている。

理恵は考える――日本を米国から叩き出すこと、それが米国の〈国益〉に合致するとは思えない。米国の半導体業界の利害を最大限に追求するということ、それは同時に米国の国益との矛盾が表面化することにもなる。

つまり極東アジアでは最も信頼のおける同盟国・日本を米国から離反させるような結果になる。経済関係でいかに対立しようが、米国にとって日本は依然として重要な戦略的パートナーである。その日本を米国から離反させる政策を強行しようとしているのだ。常識的には考えられないことだし、それは米国の国益にとってはマイナスになるはずだ。それが第一の疑問……。

民主主義を擁し、共有できる価値観を互いに持ち、そのうえに同者は緊密な同盟関係にあることを、世界に向かって喧伝（けんでん）してきた間柄にある。両国の友好関係は水遠に続くものと信じられてきた。日本が米国にとって脅威になっていることなど、とても考えられないことだった。困ったことに、一方の不信感はまた一方の不信感を刺激し、異常に増殖させることになる。

実際、日本国内の世論は、今度の事件を契機に反米の色彩が強まっている。こういう問題ではナショナリズムを刺激しやすいのだ。もっとも危険なことは、偏狭なナショナリズムが胎動してくることだ。悪くすると、戦後五十年近くにわたって続いた日米の安定した関係は極東の安全保障の枠組みを含めて、政冷と経済の両面から一気に崩壊してしまう危険すらあるのだ。その予兆は確かにある。それはアイコック大統領ならずとも充分に予知できることではないのか。

ホワイトウスは、事件が発生してから沈黙を守ってきた。傍観を決めこんでいるかに見える。ということは、アィコック政権は日本を見限った……ということも考えられる。そうだとしたら、問題はその理由である。

ようやく貿易摩擦が鎮静の兆（きざ）しをみせたかと思ったら、今度は反トラスト法違反事件を引き起こすなど、日本は確かに厄介な存在である。だが、アィコック大統領が、日木に決定的なダメージを与えるような〈日本つぶし戦略〉に同意するだろうか。戦略的に考えれば、政治的リスクは大きいはずだ。日米関係を損なうまでに日本を追い詰める理由はなんだろう。そ

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

れが第二の疑問だった。

理恵がそこまでいうと、裕美が大きく首を振ってうなずいた。

理恵は言葉を続けた。

「それにもうひとつは、パタヤビーチ・セミナーのこと……ロバーツ教授も関係していたみたいね」

パタヤビーチ・セミナー……裕美には初めて聞く話らしく、びっくりした表情を浮かべている。さすがにシオリはそのセミナーのことは知っていた。

セミナーでの日米の話合いは、不調に終ったようである。パタヤビーチではなにか話し合われ、どんなことで日米は対立したのか。理恵には肝心なことは、なにもわかっていなかった。理恵は幾つも疑問を提示しながら話をしている。電話で佐瀬は「彼らの陽動作戦ではないか」とすらいった。

「カルテルということなのかなあ」

裕美か横あいから、明らかに冗談だという口調でそういった。

「その可能性が」番大きく思える」

理恵が受け流すように答えた。裕美はまたもびっくりしたような顔をした。理恵は構わず話を続けた。

日本の企業を反トラスト法違反で引っかけたその後で、逆に国際カルテルの提案をしてくるとは、実に巧妙なやり方だ。だが、米国の提案を日本側は拒絶したらしいのだ。これまでの経過を考えれば、日本側かやすやすとそんな謀略じみた〈提案〉に乗るだろうか。〈囮(おとり)捜査〉の可能性だってある。日本企業は米国のこうした汚い手で、幾度煮え湯を飲まされたことか。当事者ならば、警戒心を高めるのも当然である。

日木が提案を拒絶することは、周到な準備のもとに開かれたセミナーであり、スコット社長のことだから、予定どおりのことではなかったのか。国際カルテルを日本に提案しておきながら、それを日木に拒絶させる……これは確かに手のこんだ芝居である。佐瀬がいうように、パタヤピーチ・セミナーは彼らの〈陽動作戦〉であったのかも知れない。でも、なぜそんな芝居をする必要があったのか。それが第三番目の疑問だった。

理恵がそこまで話し終えたとき、ボーイが凄いボリュームのシーフード

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

サラダを運んできた。中国系の年若いボーイだった。熱心に話しこんでいる女たちを怪訝そうな顔をして見ていたが、料理を無造作にテーブルの上におくと、取り澄ました顔をして調理場のほうに姿を消した。そのボーイの後ろ姿をシオリがぼんやりと見ていた。

理恵の話はまだ続いていた。

その一方では反トラスト法違反事件を裁く公判廷での審理は、これも異例のスピードで進められている。どうあっても日本に有罪判決を下す、これは司法省当局の執念になっている。だから一切の取引には応じようとしていないのだ。

だが、こういう場合、たいていは裏のチャンネルが動き出す仕組みになっているものだ。そのシグナルがパクヤビーチ・セミナーということなのか。それにしては、なんの根回しもなく突然、国際カルテルの話を片ち出してくるとは……無策に過ぎる。そう考えると、どれもこれもがつじつまがあわなくなってしまうのだ。

背後で事件を操っている人間がいるように思える。ホワイトハウス、司法省、米国半導体業界、それにモトラム社の動き、日系企業を襲う労働攻勢。見えてくるのは、日本を徹底的に叩き潰そうとする〈彼ら〉の強い意志だけである。

彼らは何者なのか。米国政府と〈彼ら〉との関係。パクヤビーチ・セミナーを演出したウィリアム・スコットの役割。それにロバーツ教授のこと。沈黙する大統領府。崩壊の危機を迎える日米関係。それでも追撃の手をゆるめぬ米国の意図。

理恵はあれこれ考えてみたが、結局、考えは頭のなかで空転を続けるだけだ。だから裕美の質問にどう答えたらよいのか、迷ってしまうのだ。

そこで理恵の話は一段落した。

「まあ、ロバーツ教授には会ってはみたけれど、そういうわけであまり大した成果はなかったということなのよ」

これで理恵は自分が知っているほとんどのことを二人に話したことになる。シオリはすっかり考えこんでいるようすだ。再び沈黙かおとずれた。その沈黙を破っていっもの調子で裕美がいった。

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

「どうかしら……私たち協定を結ぶことにしない。私は新聞記者の立場。シオリは産業調査員ということで当事者の一人。それに理恵はエコノミストの立場でなにやら重要な情報を握っている。それぞれ立場は違うけど、興味の対象は二つ。ここで協力しあえば、なにかとお互いに役にたつと思うんだけど、どうかしら？　もちろんオフレコの約束は守ることにするわ」

「協定……」

理恵が呟いた。

どう答えたらよいのか、シオリは困惑した表情を浮かべている。今度のことで三人が応力すること、それは理恵も先はどから考えていたことである。裕美がいうように三人で協力すれば、〈敵〉の正体を暴き出すことができるかも知れない。文殊の知恵ということだってある。

理恵にすればこうなると執念みたいなものだ。あまりにも無策に流れる日本の対応に腹立ちを覚える一方で、理恵の内部に奇妙な形で〈愛国心〉に似たような感情が芽生え始めている。不思議なことだが、自分の気待ちのなかに、そんな思いがくすぶり始めていることに理恵は気いていた。佐瀬の顔が脳裏に浮かんだ。佐瀬も同じようなことを考えているような気がする。

シオリは口を閉ざしたままだった。身構えるようにして裕美をみている。キャンドルの火が瞬きをする度に、シオリの瞳の中で光っていた。

「フォーラムXという秘密めかした組織があることを知っている？」

裕美が突拍子もなくいった。

「フォーラムX？」

理恵が聞き返した。

裕美の表情にゆとりの笑みが浮かんだ。裕美はまず自分の握っている情報を投げ出すことで、三人の協力関係を既成事実としてしまうことを意図しているのか、そこらあたりの駈け引きは新聞記者らしく巧みだ。

事件の背後でうごめいている人間たち。いかにもそれらしい組織名を持つ秘密結社だと理恵は思った。シオリも関心を示した。

裕美は毎朝新聞のワシントン総局が入手した情報だといって、〈フォーラムX〉なる組織について話し始めた。

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

「彼らは大統領府の政策決定に影響力を行使できる力を特っているだけでなく、世論形成にも重要な役割を果しているというの。ニクソン大統領を失脚させたのも、石油危機を演出したのも、最近の話ではエイズ騒動を演出したのも彼らの仕業（しわざ）だといわれている。重大な事件か起こるたびに、彼らの動きがとりざたされている。今度の問題でも背後で彼らが動いているのではないか……ワシントン総局はそうにらんでいるみたい」

〈フォーラムX〉なる組織についての裕美の話が続いている。すべてのことには裏と表がある。ビジネスの世界にもやはり裏と表の世界かおる。表の世界の話だと、たいていはマスコミが大きく報道してくれるし、場合によっては国会や裁判で白黒の決着がつけられることがある。だから人々は、よほどへそ曲がりでない限り、それを公知の事実として素直に受け入れる。

だが、裏の世界の話は決して公然とは議論されることがない。物事が裏から裏で処理されていくからだ。もうひとつの歴史、つまり〈裏面史〉と呼ばれるのがそれだ。歴史もまたそうである。

世界史を動かしてきた原動力は、まさしくこの裏と表の世界の相克のなかにあったのではないかと、裕美は生真面目な顔をしていった。

裏面史を綴る人々は、敗者の常として非公然とならざるを得ない。だから彼らの存在はどこか胡散臭く、活動は陰謀じみており、組織も秘密結社の形態をとっているのだ。だからといって彼らは人目を忍んでひっそりと棲（す）んでいるわけではないし、石窟のなかで怪しげな宗教的儀式に明け暮れる生活をしているわけではない。ありふれた普通の人間としてこの世界で日常生活を営んでいるのだ。

彼らは有能なビジネスマンであり、影響力の大きい政治家であったりする場合が多い。そこが秘密結社たる所以（ゆえん）なのである。今度の場合もそうした秘密結社が事件に介在していることは間違いないと裕美は断定的にいった。

我々か棲んでいるこの地球上に色々な目的を持った秘密結社が存在していることは確かだ。ユダヤ人を中心とした秘密結社フリーメーソン、金融界を牛耳る金融マフィアの存在、食料の生産と流通を支配する世界的な結社。さらに石油危機を演出したグループの存在など。そういう類の秘密結

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

社か存在して、企融や経済、社会生活に大きな影響力を与えているだけでなく、国際政治にも彼らが深くコミットしていることもまた、広く知られた事実だ。

しかし、裕美はエイズ駆動までが、実は仕掛けられた陰謀だという。話としては面白いが、にわかには信じ難いことである。裕美は本気で信じているのだろうか。だが、裕美の性格からして根拠のないことを話すはずはない。どんな証拠を握っているのか。話は裕美のペースで進んでいる。

「まさか……エイズ騒動までを陰謀だというの。ちょっと私には疑問だわ」

理恵が異論を差し挟んだ。異論というよりはちゃちゃを入れる例の口調である。が、裕美は大真面目で答えた。

「そのまさかが、現実なのよ。エイズウイルスが存在することも事実だし、それに感染して多数の人間が死んだこともみんな事実。だけどエイズ騒動の結果、売春婦は街角から姿を消し、ホモセクシャルやフリーセックスも影を潜めた。つまりエイズの恐怖から男も女も家庭に帰るようになり、米国には健全な家庭が蘇(よみがえ)ったということなの。必要以上に恐怖心を煽り立てること、つまり騒ぎを大きくすることが目的だった、と思わない？」

汎アメリカを再生する上で、健全な家庭をいかにして蘇らせるか……米国で議論されるようになったのはだいぶ昔のことだったような気がする。健全な家庭を再生するということは、労働力の安定確保という経済上の理由のほかに、軍事戦略の意味からも重要な意味を持っている。つまり軍事力の最も重要な基礎となる〈兵力を生産し供給〉する役割を担(にな)っているのか家庭である。それはクラウゼヴィッツが『戦争論』を著して以来、軍事戦略家の常識になっていることだ。

ところが離婚の増大や結婚をしない人が増えてきたために米国では七〇年代以降、急速に家庭の崩壊が進み、家庭生活の温みを知らないままに育つ子供たちが、全米の三十パーセント近くになっているという。これは確かに驚くべき数字だ。

家庭の空洞化は米国にとって深刻な問題だった。カーター政権の時代だったか、いかにして古き良き時代の家庭を蘇らせるか、大統領年頭教書で大きく取り上げられたことを理恵は覚えている。健全な家庭を米国の社会

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

に蘇らせること、それが経済と軍事に蜜接に結び付いていること、それはそれで理解できるし、米国では深刻な社会問題になっていることも知っている。いかにも裕美らしい発想法ではある。だが、裕美の話は飛躍しているように思える。理恵は裕美の話を黙って聞いていた。

「それだけではないのよ。エイズは中央アフリカ起源説が有力なようだけれど、どうもこれは怪しいものだわ。野生の動物を生け捕りにすることを生業（なりわい）としていた男がミドリザルを追いかけているうちに噛みつかれて、ウイルスに感染したというのが、その起源説の根拠となっているようだけれども、おかしいと思わない？」

裕美のいうところでは、人間とミドリザルは何千年も前から共存していたというのに何故これまでエイズか発病しなかったのか、それが第一の疑問。第二の疑問はエイズ汚染の経路がくるくると変わっていること。第三にと、裕美は幾つもの疑問を指摘した。なるほど……とは思うのだが、裕美のいっていることは、これといった確証はないようだ。しかし、裕美は誰かが目的をもって演出したことだったと、断定的にいった。

「もっとも疑いが濃いのが米軍関係、生物科学兵器の開発と関係かおるのではないかともいわれているの。つまり人間が作りだしたウイルスが根源ではないか、たとえばアフリカミドリザルのウイルスを培養し、それが実験過程で外に漏れたとか……そういう可能性は否定できないと思うの」

裕美がいうようにエイズ騒動の結果、性の乱れも影を潜め、男たちを家庭に帰らせることになった。性の乱れによって引き起こされたエイズ騒動は、皮肉なことに健全な家庭を再生するのに役立ったということになる。

結果論としていえば裕美のいうとおりかも知れない。が、そこにフリーメーソンのような秘密結社が介在していたとは、理恵には少しばかり眉唾に思えてならない。どこで聞いてきたのか、裕美は、しかし、そのことを本気で信じているようだ。

エイズ騒動のことはおいておくとしても、やはり気になるのは裕美がいった〈フォーラムX〉のことだ。このアメリカでそういう種類の組織が存在したとしても、決して不思議ではないが、その秘密結社と今度の事件との関係、彼らはそこでどんな役割を果しているのか。ホワイトウスにまで

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

影響力を行使できるという〈フォーラムX〉にはどんな人間が参加しているのか。毎朝新聞のワシントン総局は〈フォーラムX〉をどの程度まで調べ上げているのか。裕美はまだそのことには触れていない。

テーブルにはメインディッシュのペッパーステーキが運ばれてきた。シオリが二本目の赤ワインを追加注文した。裕美の話はいよいよ佳境に入ろうとしていた。

「少し前置きが長くなってしまったみたいね。それで……通産省の田所官房長が、そのフォーラムXと秘かに接触するため、このワシントンに来ているらしいの。この話、シオリは当然聞いているわね？」

「まさか……！」

シオリが答えた。信じられないという顔をしている。実際、シオリには信じられないことだった。

米国駐在の産業調査員に連絡もしないで通産省の高級幹部が訪米するなんて、考えられないことだし、それが事実だとすれば、シオリは本省からなにも知らされていないことになる。今日の大使館で行った対策会議でもそのことは一言も出なかった。

考えられることはひとつある。それはハイテク・ワーキングの開催に先立ち、米側の考えを探るために、田所官房長が単身ワシントンに乗りこんだということだ。次期次官候補に目されている田所としては、これは点数をあげる絶好の機会になる。田所ならば、考えそうなことである、とシオリは思った。

だが、田所官房長はあくまで隠密裏にことを進めようとしているようだ。ワーキング・グループの事前の打ち合せならば、なにも秘密にするようなことではない。なぜ行動を秘匿（ひとく）しなければならないのか。これは裕美がいうように〈フォーラムX〉と接触するためなのか。裕美の話は真実味があるようにシオリには思えてくる。

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

「どうかしら……これは相談なんだけれども、あなたたち帰国をあと一週間ほど延ばすことができないかしら？」　と、シオリが改まった口調でいった。裕美が大きくうなずいた。それをシオリは、淑女の協定を新聞記者の裕美が受け入れたものと受け取った。　「あと一週間か……」

理恵が呟くようにいった。

男女同権が、慣行としても実際上も職場に確立しているジャーナリストとはわけが違うのだ。出張期間を一週間も延ばすことになれば、またぞろ所内からぶつくさ文句が出てきそうだ。それでなくとも、米国出張には異論が出ていたのだ。渋い顔をする野沢崇研究調査部長の顔が浮かんできた。

でも、あとのことは、その時になって考えればよい……そう思うと気分が楽になってくる。

「それで……？」

裕美が性急に促した。

「手伝って欲しいことかあるの」

と、シオリがいった。

「どんなこと？」

理恵が聞き返した。

シオリが話を始めた。さすがに特報は豊富だった。

日米両国政府間で行われた交渉の経過、そこで明らかになった両国政府の立場とこの問題に対するスタンスの違い、業界の動きがどうなっているか、利害が錯綜し業界も必ずしも一本にはなっていないこと、さらに外務省と通産省の微妙な立場の違いなど、シオリはこの間の動きを詳細に話した。

「経済問題でアメリカが日本に反応するいくつかのパターンというか、危機ラインというものがあって、そのハードルを超えた瞬間、アメリカは異常な反応を示すことは、あなたたちも知っているわね」

たとえば、とシオリは言葉をつないだ。

第一は特定セクターで失業率が七パーセントを超えたとき、第二は日本の商品か米国市場で二十パーセントを超えるシェアを占めたとき、第三は対米出超額が輸出入総額の二十パーセントを超えたとき。こういう条件が

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

揃うと、米国は激しい反応をみせることは、この間の貿易摩擦でも体験済みのことである。

これまでだと、輸出入を行政強権でもって水際で押えこむなど、貿易自体を国家管理の枠内に封じこめ、日米の間でなんとか折り合いをつけてきたというのが、日米貿易摩擦の経過だった。強引に円高を誘導したことも、そうした政策努力のひとつたった。しかし、実際には、対米貿易黒字は減少どころか、逆に増大した。すでに行政による調指成能は有効性を消失していたのである。そのことは一通産官僚であるシオリには、痛いほど思い知らされていることだ。

対米貿易黒字を縮小し、そのうえで米国市場のシェアを維持するには、もはや直接投資しかない。それが最終的な結論だった。米国も日本の投資を歓迎していた。それで日本企業の多くは対米投資に走ったのだ。半導体など電子工業の対米投資か活発になったのは、シオリがニューヨークに赴仁する直前のことだった。

問題を単純に考えれば、外国資本の投資は歓迎されるべきである。地元の失業問題を解決し、行政に対しては税金という形の恩恵を残す。だから日本の企業家たちは対米投資では、米国に感謝されこそすれ、非難されるとは考えてもみなかった。日本の企業は最初楽観的な考えを持っていた。それが突如として、アメリカは日本を叩き始めたのだ。なにがそこまでアメリカをいきり立たせるようなことになったのか。

「やはり日本は米国のアキレス腱を踏みつけるようなことをしたのではないか、と私は思うの。しかも日本は意識しないでアメリカの〈虎の尾〉を踏んでしまったのではないか、そこが悲劇なのよ」

「シオリのいうとおりだと思う」

裕美にしては珍しくシオリのいったことに同調的にうなずいた。

〈虎の尾〉か、そのことはロバーツ教授と話したときも話題になった。だが、教授は理恵の質問に意味ありげな笑いを口元に浮かべただけで、直接には答えなかった。

「〈虎の尾〉、そのことをハッキリさせれば、今度の事件の全貌はかなり明確になるはずだわね」

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

理恵がいった。「で、シオリ、手助けして欲しいことがあるとかいっていたね。それ……どういうことなの？」

理恵か聞いた。

「アメリカに対しては従順さをモットーとしている日本が、いきなりアメリカに噛みつく……そうしたら彼らはどう反応するかしら？」

シオリの口元にいたずらっぽい笑みがこぼれていた。

「アメリカに逆襲するということなの？」

裕美が聞き返した。

「そう……！」

「で、なにをやろうというの？」

今度は理恵が聞いた。

「まず挑発をしてみようと思うんだけど？」

「アメリカを挑発する？」

「そう、思いっきり挑発するの」

シオリにしては珍しく勢いづいている。ゆっくりと、シオリはアメリカを挑発する計画を話し始めていた。

2

ホテルに戻ってみると、レセプションにロバーツ教授からの伝言か残されていた。

理恵は誰もいないエレベータのなかで、首を傾(かし)げながらロバーツ教授か残したメッセージに目をとおしていた。

「明日午後六時……か」

理恵は呟くようにいった。明日の同じ時刻にシオリと会うことになっている。

この際である。ロバーツ教授の方を優先させるべきだと思った。

翌日の午前、理恵は調査報告書の下書きをつくる仕事を終え、午後からワシントンの繁華街をぶらついてみた。裕美もシオリもこのワシントンで忙しくかけずり回っているはずである。ふっと時計をみると、まだ午後の

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

三時半だった。ロバーツ教授との約束の時間までは二時間以上ある。

長閑（のどか）な早春の太陽が淡く街を輝かせている。ついでにワシントン記念塔のあたりからウエストポトマック公園の方角に足を伸ばしてみることにした。ポトマック河から吹き上げる風はまだひどく冷たく、理恵は思わず身震いをした。

理恵はグイダルペスインの湖畔をゆったりと歩きながら佐瀬のことを考えていた。昨夜遅く佐瀬から電話が入った。佐瀬はまだサンフランシスコに残ってヘッドハンティングを続けている。来週にはメドがつきそうだ、と案外元気な声を出していた。米国の電子工学の権威たちを結集したシンクタンク構想は、順調に進んでいるようだ。痩せた躯のことが理恵には心配なのだが、相変わらず精力的に動き回っている。

日系企業の多くが米国から撤収する方向で動きだしているなかで、佐瀬の動きは流れに逆行する動きである。それが日米の新しい紛争の火種にならなければと、あのレストランでシオリがいっていた。

メキシコに創設したシンクタンクで開発をしようとしているのがＡＩチップだとすれば、ＳＤＩ軍事技術とも密接に関係する技術開発であるだけに、これは確かに微妙である。シオリがいっていたように、国防総省はこうした技術が外国企業に流れることについては非常に神経質になっている。それが日米の技術摩擦の新たな火種になりはしないか。シオリがいった米国にとっての〈虎の尾〉とは、そのことであるかも知れないのだ。

コンピュータの分野ではソフトとハードの両面での市場分割は事実上終っている。通信回線についても、国際的な棲分（すみわ）けができ上がっている。問題は肝心な半導体だった。半導体はコンピュータ製造の素材ということだけでなく、最近では半導体自身がコンピュータ並の性能と機能を兼ね備えた製品が登場してきている。ＡＩチップとかワンチップ・コンピュータと呼ばれるものがそれである。

佐瀬の計画では、このワンチップ・コンピュータを早ければ来年早々にも市場に送り出す予定になっている。すでに日興製作所の抜術仲が概念設計を終え、現在はそのソフト部分の開発に取り掛かろうとしているところである。そのソフト開発を米国に設立するシンクタンクか担当することに

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

なっているのだ、と佐瀬はいった。

ワンチップ・コンピュータではたぶん、少量多品種生産こそが、市場を制覇する上で、技術上の決め手になるはずだ。カスタマーの要求に柔軟に対応すること、つまり小回りのきく生産休制を築き上げることがもうひとつの問題だった。今では半導体は４メガビットからさらに１６メガピットの時代に突入して、いよいよ超高集積半導体の時代を迎え、業界はさらに次世代の半導体素子の開発に鎬を削っている。だが、半導体素子の開発の方向はもうひとつ、カスタム製品の開発にある。佐瀬はいつだったか、業界のそうした技術開発の方向を話してくれたことがある。

また、少しばかり日が伸びたかしら、と理恵は思った。早春のワシントンには珍しく、くっきりと夕刻の空は晴れ上がっていた。時計に目をやると、既に四時を回っている。

理恵は流れてきたタクシーに向かって、大きく手を上げた。タクシーが大きなきしみ音をたて停車した。黒人の運転手が白い歯をみせにっこり笑うと、大きな躯を揺すってみせた。

ウエストポトマック公園から一四番通りに出て造幣局、農務省、歴史博物館を通り過ぎまっすぐ北上を続けると、タクシーで十分ほど走ったところに理恵が投宿しているホテルかある。シャワーを浴び、化粧をしなおして服装を整えたときには、約束の時間が迫っていた。

昨夜、ロバーツ教授か残したメッセージには、このホテルのラウンジで待っていると書いてあった。理恵はもういちど姿見に全身を映し出してみた。充分にチャーミングに見える。理恵は満足そうにうなずいてから弾んだ足どりで部屋を出た。

シオリが昨夜、話した計画だと、ロバーツ教授に対して、もう一度、理恵の方からコンタクトを求めることになっていた。最初はあれほどかたくなに面会を拒絶していたロバーツ教授が、わざわざ訪ねてくるとは、いったい、どういう風の吹き回しなのか。まあ、会ってみればわかることだ。理恵はなんだか気分か高揚してくるのを覚える。ロバーツ教授からメッセージが屈いていたことは、昨夜、シオリに電話で伝えておいた。

「ロバーツ教授が……？　いよいよ敵も動き出したんじゃない。面白いこ

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

とになるかも……。でも気をつけてね」

と、シオリは電話口でいった。アメリカを挑発する計画の第一段は強烈なパンチになるはずだ。ロバーツ教授との話が終ったあと、シオリと裕美が一緒にこのホテルにくる約束になっている。

理恵は中二階でエレベータを降りた。

ラウンジはそれほどの混雑ではなかった。理恵はゆっくりと見渡した。ラウンジの中央に口バーツ教授の姿があった。次の瞬間、理恵は驚きで声を上げそうになった。

問違いなく、野沢研究調査部長だ。だが、どうしてこんなところにいるのか。つい二日ほど前、電話を入れたとき、野沢は東京にいた。そのときは米国に出張するとは、一言もいっていなかった。

野沢はロバーツ教授と肩を並べて、ゆっくりと歩み寄ってくる。特徴のある笑顔を理恵にみせ、軽く手を挙げている。

三人はラウンジの中央に席をとり、向かい合うようにして座った。

野沢はロバーツ教授とはコロンビア大学の大学院で一緒だったとかいっていたことを理恵は覚えている。二人は親しげに話を続けていた。理恵には、半分ほどしか、話している内容を理解することができない。なんだか、落ち着かない気分だった。理恵は二人の男を等分に見比べるようにして、注意深く観察した。

理恵に接するロバーツ教授の表情は優しげである。打ちとけた態度をみせている。この間会ったときとは、明らかに違っている。理恵はロバーツ教授の態度が変わったことに戸惑いを覚えた。それにしてもわからないのが、野沢研究調査部長の態度と立場である。

なぜ、米国に出張したのか、それを説明するわけでもない。悠然と構えているところは間違いなくいつもの野沢である。しかし、ロバーツ教授と談笑を交わしている野沢はまるで別人のようにもみえてくる。よく聞いてみると、話の内容は日程の調整のようだ。二人の男のやりとりは一段落した。ロバーツ教授は理恵の方に躯を向き直すと、改まった口調でいった。

「今朝の東京では、毎朝新聞に半導体の国際カルテルを米側が呼びかけていると大きく報道されていたそうですね？」

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

「毎朝新聞に……？」

理恵はぎくりとして聞き返した。手ごたえは確かだった。ロバーツ教授は探るような目で理恵を見つめている。躯がどうしようもなく緊張でこわばってくる。

ロバーツ教授が言葉を続けた。

「凄いスクープですね」

国際カルテルのことを暴露する記事、それはシオリが提案した計画にしたがって裕美が書き上げたものだ。昨夜、裕美が部屋から引き取ったのは、確か午前零時を回った時刻だったと思う。そうすると、裕美はあの後で原稿を書き、東京本社に送ったのだろう。

東京とワシントンの間には宇宙通信回線で結ぶことによって、新聞の最新版を瞬時にして入手できるシステムかでき上がっている。ロパーツ教授はそれを見たのであろうか。

どういう反応が出てくるか、楽しみだと、シオリはいっていた。反応はすでに現れた。理恵はロバーツ教授の顔をじいっと見ている。

「毎朝新聞にスクープされたため、日米交渉の流れは大きく変わるかも知れないね。あの記事を読めば、悪いのは日本だけでないということになる。その意味で、米国に与える衝撃は大きいと思うよ。あの記事を書いた記者はなかなかたいしたジャーナリストだ……」

ロバーツ教授がそういった。

たぶん裕美は昨夜、打ち合せどおりに記事を書いているはずだが、理忠はまだ記事を読んでいない。打ち合せ通りの記事だとしたら確かにロバーツ教授かいうように、関係者に対して大きな衝撃を与えるに違いない。記事には今度の事件は実をいうと仕掛けられた事件であること、米側は事件を仕掛ける一方で日本に対して国際カルテルの締結を求めていること、さらに日本側が国際カルテル締結に同意するかどうか、そのことが反トラスト法違反裁判にも大きく影響するであろうことなど、事件の中身と経過を詳細に書くことになっていた。

問題は〈彼ら〉があの記事を読んでどう反応するかだ。まず、最初は目の前にいるロバーツ教授である。理恵は注意深くロバーツ教授を見つめて

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

いた。教授はなにか疑いを抱いているような顔をしている。
理恵と裕美との関係、さらにシオリを含めた三人の関係をロバーツ教授かどこまで知っているのか。少なくとも三人が一緒に動いていることを知られるのはまずい。こうなると、野沢さえも味方なのか敵なのか、わからなくなってくる。理恵は慎重に言葉を選びながら逆にききかえした。
「で、どういう内容の記事だったんですか？」
「ほほう、内容をご存知ない？　そうでしたか。国際カルテルの内容に関して当事者しか知り得ないような内容、事実関係を正確に書いてありましたね」
皮肉をいっているのか、それとも裕美が書いた記事を誉めているつもりなのか。ロバーツ教授の表情は例によって曖昧だった。
「教授は日米交渉の流れか変わるとか、おっしゃいましたね。どんなふうに流れか変わるというのですか？」
「第一に、今度の事件は米国半導体企業の陰謀ではなかったか、という疑惑が強くなったこと、第二には、米側は交渉のテーブルにつくことを拒絶する根拠を失った、そして第三に、そうである以上、中断している交渉を再開する可能性か出てくる。私は毎朝新聞のスクープの衝撃をそのように受け止めている」
「交渉が再開される？」
「そのとおりです」
ロバーツ教授は断定的にいった。かたわらに座る野沢が大きくうなずいてからいった。
「実をいうと、通産省の田所さん、それに電子工業連合会の坂田専務と一緒なんだ」
「田所さん……？」
田所官房長はワシントンに来ている。やはり裕美がいっていたことは、木当のことだった。電子工業連合会の坂田専務……どこかで聞いた名前だが、すぐには思い出せない。通産省の高官である田所官房長のことは理恵は知っている。政治的手腕にも優れ、官僚にしては珍しくものをハッキリという人物である。その田所と一緒に訪米したということは……野沢も今

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

度の事件に深くコミットしていることになる。
「そう、田所宮房長。このまま事態を放置すれば大変なことになる。で、事態をなんとか打開できないかとやって来たんだが、今回の接触がラストチャンスになるかも知れない」
なるほど、そういうことかと理恵は思った。考えてみれば、野沢は民間調査機関の一部長に過ぎない。その野沢がなぜ、通産省の高官に同行してアメリカへくることになったのか、合点のいかないことだ。
さらにアメリカのどこの機関とこの問題を話し合うつもりなのか、国務省や司法省など政府部門なのか、それとも……。
「ロバーツさんを通じて〈彼ら〉と接触してみようかと思っているんだ。まあ、ヒントは君の中間報告だったがね」
「〈彼ら〉といいますと？」
「とぼけちゃいけないよ。ご存知のウィリアム・スコットを始めとする半導体マフィアの連中だけど……彼らの背後にはどうやら国防総省がいるみたいで、そこのところが少し厄介なことになってね」
野沢は皮肉な笑いを浮かべている。
証拠がないのでハッキリとは断定できないが、今度の問題に限っていえば、ロバーツ教授は少なくとも味方であるとはとても思えない。今日の事態を的確に予測した例の論文、そして論文が議会図書館のデータ・ベースから突如消えたミステリアスな経過、ニューヨークの個人事務所で交わしたやりとり。どれをとってみても陰謀集団の一味の一人か、さもなければ〈彼ら〉のスポークスマンではないか、理恵にはそう思える。
どう考えても疑惑濃厚なロバーツ教授の口利きで、日本の政府高官が〈彼ら〉と接触を持とうとしている。これはどういうことなのか。しかも〈彼ら〉の背後には国防総省が動いているというのだ。ロバーツ教授はどういう立場で〈彼ら〉に田所官房長を引き合わせるつもりでいるのか。日本側は非公式とはいえ、通産省の高官か交渉のテーブルに座るのだ。理恵の頭の中は目まぐるしく回転を続けていた。
「それでは、米側と改めて問題解決のための交渉に入るということですか。もちろん非公式な交渉なのでしょうね」

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

理恵が硬い表情で聞いた。

「ロバーツさんの斡旋のおかげで、明日から交渉に入ることになる。もちろん私の立場はオブザーバーに過ぎんけどね。それにしてもあのスクープ記事は絶妙なクイミングだったね。これは日本側にすれば、神風突風になるかも知れない」

野沢の口元に笑いがこぼれている。結果としてはそういうことになるのだろうか。

ともかく膠着状態にある日米交渉に衝撃を与えること、つまり米国は日本を独禁法違反で告発するようなことをする一方で、逆に裏では国際カルテル締結を呼びかけている事実を暴露し、米国が一方的な被害者というこれまでのイメージを相対化させることに狙いがあった。

だが、目的といおうか、事件の真相を暴露しようとしたスタンスは、野沢がいったこととは微妙に違っている。流れが変な方向に向かうのではないか。

シオリの話だと通産省の大勢は対米恭順派だといっていた。米国と市場をシェアリングするにしても、問題はどういった戦略で交渉に臨むか、具体的にいえば、全面的に日本の敗北を認めた上で、国際カルテルの締結に応ずるのか。いっそのこと日米の安全保障の枠組みの問題を含めて、正面からこの問題を議論する決意を固めた上で、交渉の場に臨むのか。

シオリの話を聞く限りでは、通産省が後者の立場で交渉を進めることはまず考えられないことだ。それにシオリが計画した第二段階のタマが用意されている。シオリが考えた計画の第二段階、あれは確かに面白いことになりそうな気がしてくる。

しかし、ここで日米交渉が動き出すとすれば、予定を変える必要が出てくるのではなかろうか。それにしても、ロバーツ教授は敵なのか、味方なのか。理恵はあからさまにそのことを口にした。

「私の立場ですか……そう、日本ロビイストと考えて下さい。日本の利益のために働いている、いや正確にいえば、日米両国のために働いている……」

ロバーツ教授はあっさりと答えた。信じてよいものか、ロバーツ教授か

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

日本のために働いているロビイストだったとは……理恵は正直いって篤いた。野沢は意味ありげな笑いをしている。

「問題は日本の世論が次第に反米ナショナリズムの方向に傾いていることなんだよ。それを煽り立てる意図的な動きがあるように私には思える。たとえばニューヨークのチェンバレン事務所……日本を強硬路線に誘導すること、それがチェンバレンの役割ではないかと思うんだ」

ロバーツ教授がそういったことに、理恵は大きな衝撃を受けた。

チェンバレンは半導体マフィアとつながっているとでもいうのか。

チェンバレンはシオリが最も信頼を寄せている法律顧問であり、有能なロビイストでもある。そのチェンバレンが彼らの仲間だとはとても考えられないことだ。実際、チェンバレンは歴代産業調査員の信頼を全面的にかち取っていた。

チェンバレンが裏で半導体マフィアの連中、裕美がいうところの〈フォーラムX〉につながっていたとは、とても信じられない話である。シオリはそのことを知っているだろうか。

ラウンジーバーはまだ客は疎らだった。注文したバドワイザーが連ばれてきた。野沢はゆったりと回転椅子にもたれながら、暫くワシントンに残って自分の仕事を手伝って欲しいといった。理恵は生返事で応えた。

それよりもチェンバレンのことをシオリにどういう形で伝えるべきか……。

3

理恵は「……らしい」という言葉を使うことで、少しでも衝撃をやわらげたつもりだった。しかし、ロバーツ教授の話を伝えたとき、やはりシオリの受けた倒撃は大きかったようだ。そんなことはあるはずがない――。

だか、よく考えてみると、田所官房長の訪米問題ではなにも知らされてなかったことといい、本省に対する意見具申がことごとく無視される状況など、思い当たる節がないでもない。

シオリが立てた計画、実をいうとこれはチェンバレンのアイディアを借用したものであった。

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

現在の状況を正確にマスコミを通じて流すこと、それか計画の第一弾である。これは裕美の手ですでに毎朝新聞がスクープという形で報道している。「米国は汚い手を使うじゃないか」という、世論の高まりを期待したが、米国の対日リベラル派も日本に対する同情論に与するようになっている。その意味でシオリが立てた心画は成功したといえる。

計画の第二弾は、田所官房長一行が〈フォーラムX〉との間で奇妙な交渉を始めることになったため、少しようすを窺うことになるだろう。そのことを協議するために、三人は急進、理恵の部屋に集まっているのだった。

シオリには理恵の話がよほどショックであったらしく、額に縦ジワをよせて深刻な顔を作っている。チェンバレンに限って、そんなことは絶対にありえないことだ。今度の事件にもっとも真剣に取り組んできたのは、ほかならぬチェンバレンなのだ。それを一番よく知っているのはシオリ自身である。

誠実で仕事熱心。裏を持つ生活をしているなんてとても考えられない。それに彼は大の日本ファンだ。チェンバレンは日本人の血が四分の一混じっていることを誇りにしている男だ。第一、チェンバレンは日木の通商問題を手掛けることで、弁護士として成功を収めた人間である。ビジネスとして考えても、日本との関わりは重要な意味を持っている。その日本を裏切って、こともあろうに敵に通じていたとはとても信じられない。

チェンバレンを陥れるために故意に流した憤報ではないか、そんな気もする。まして、その情報源がロバーツ教授だとすれば、なおさら疑ってみなければなるまい。チェンバレンのことを考えていると、シオリは胸がうずいてくる。

いずれそのことはチェンバレン自身に確かめてみる必要がある。

「産業調査員の法律顧問が彼らの仲間だったなんて、面白い展開になってきたじゃない。それに敵だとぽっかり思っていたロバーツ教授か、実をいうと味方だったなんて、事実は小説よりも奇なりかしら」

シオリがチェンバレンに秘かな思いを抱いていることを知ってか知らずか、裕美は盛んに面白かっている。

毎朝新聞のワシントン総局の連中と一緒に行動しているだけに、裕美の

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

動きには機動性があり、持ってくる情報も一級だった。〈フォーラムX〉のことについてもかなり正確に調べ上げていた。

「例の〈フォーラムX〉のこと、だいたい調べがついたわ。そうそうたる人間が参加しているみたいね」

シオリは息をのんで、裕美の話を聞いている。この名簿はワシントン総局の連中が調べ上げたものだといって、裕美は次々に名前を挙げていった。さすがにチェンバレンの名前はなかった。

〈フォーラムX〉の構成メンバーは確かに華やかな顔ぶれだ。予想したようにモトラム社のスコット社長が加わっているのは当然として、政府高官や高級軍人、政治家、経済人、著名な学者やジャーナリストなど、この米国ではエスタブリッシュと呼ばれる階層に属する人々がメンバーに加わっているのが特徴だった。

裕美か上げた名簿には、ウォーレン・マークラ通商担当次官や、アイコック大統領の側近でホワイトハウスのなかにあっては対日強硬派を必死で押えこむ側にまわっているとされるシャーマン補佐官、知日派の重鎮で対日世論をリードしているウエカーズ教授の名前もみえる。それに軍需産業の経営者の顔もある。おや、と思ったのは全米電子労連のマックス委員長がメンバーに参加していることだった。労働界の指導者といっても、肢もドクターの学位を持つインテリである。ただ、メンバーの構成からみると、マックス委員長の存在はやはり異色だった。

理恵はシリコンーバレーで起こった一連の労働争議を思い出しなから、労働界の大物がメンバーに加わっている意味を悟った。

しかし、メンバーをみる限りでいえば、総じてアメリカ上流階級のサロンのようでもある。しかも東部インテリがメンバーの中心になっている。彼らの経歴や職業、知名度から判断して、とても秘密結社のメンバーだなんて考えられないことだ。それに彼らの公的な発言をみると、必ずしも対日強硬派ではない。モトラム社のスロット社長を除けば、むしろ今度の問題ではいずれも慎重な発言をくりかえしてきた人たちばかりだ。それにもうひとつ、半導体業界に直接関係している人間は、これもスコット什長ただ一人である。

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

「そう、確かにスロット社長を除けば、今度の問題で過激な発言をした人問はいないみたいね。そこが秘密結社らしいところではないのかしら……」

裕美のいったことには、ちょっと待てよ、という感じがする。まず、彼らか本当に今度の問題で、あの強硬な対日政策を決めた人間たちとは、とても思えない。日米秘密交渉の米側の相手はこの〈フォーラムX〉というのか。彼らはどんな布陣をしいて交渉に臨もうとしているのか。彼らが交渉の場に出てくること自体が場違いな感じがする。

秘密の交渉は明日から始まることになっている。米側は和解の条件として、どんなことを要求してくるか、交渉にはどんなメンバーか出てくるのか。モトラム社のスロット社長は交渉の場面に顔を出すのか。シオリの専らの関心は、そのことにあった。

「そのことよりも、問題として重要なことは、日本側の対応じゃないかしら。交渉の場は設定されたはいいけれど、果して日本側の足並みが揃うのかしら……少し無理なんじゃないかと思うけど」

それは理恵のいうとおりだった。

今度の場合、果して田所が業界の利害を調整した上で訪米しているかどうか、シオリには疑問に思えた。国内世論は反米の色彩が強まっている。だが、利害関係が錯綜して単純でないのが、この業界である。交渉の難しさの原因のひとつに、業界のまとまりの悪さかある。パタヤピーチ・セミナー以降、対米方針をめぐって業界内部の亀裂はさらに深まっている。それを一本にまとめることは大変・忍耐のいる仕事だ。

実際、米国の要求にどのように対応するかで、日本企業の首脳たちの議論は真っこうから二つに分裂していた。ひとつは米国の誘いに乗って国際カルテルに参加した方がなにかと得ではないかというグループ。このグループに属するのが東洋電気、東京通信機、日浦などだ。これに対して、米国の要求は理不尽であり、とくにカルテル形成の呼掛けに対しては、慎重に対応すべきだと主張するグループ。こうした主張をする半導体メーカーは業界では民族派と呼ばれていた。民族派の代表格が日興製作所、三唱電気などであった。

カルテルの取り扱いをめぐっては、業界の内部で激しい議論を呼んでい

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

た。日米間の交渉がまとまったとしても、今度は業界の調整が難航して、結局、振り出しに戻ってしまうなんていうことも、考えられなくはない。そのことはシオリが最も懸念していることだ。

だから問題は、今度の交渉にどういう方針で臨むかだ。田所官房長自身が訪米し米側と半導体投資問題を協議することになったと、川北ニューヨーグ・ジェトロ所長に田所自身が直接連絡をしてきたのは、つい昨日の午後のことである。川北が今朝の連絡会議で報告したところでは、業界から交渉の権限を一任され、電子工業連合会の坂田専務理事と田所官房長が全権代表として、交渉に当たることになっているようだ。もちろん、シオリも交渉団を手助けすることになっている。

「で、日本側はどういう方針で交渉に臨むことにしているの？」

裕美が聞いた。

「まさか、記事にするつもりじゃないでしょうね。わかっていると思うけど、大変微妙な時期なんだから……」

シオリが冗談ぽく答えた。

「わかっているわよ……要するに、言くなということなのね。で、やはり日木側のスタンスは対米恭順路線ということ？　まあ、あの連中じゃ、残念ながらそれしか考え付かないでしょうね」

「そうなの……」

シオリが力なく答えた。

4

半導体の投資摩擦を解決するための日米秘密交渉は、ワシントン近郊のある別荘で行われていた。

米側の代表として顔をみせたのは国務省のウォーレン・マークラ通商担当次官と全米半導体産業協会の会長を務めるデビッド・ディクソンだった。日本側は通産省の田所官房長、それに電子工業連合会の坂田専務理事の二人である。四人の男は、緊張した表情で暖炉の前にしつらえられたソファに腰を降ろして向かい合っている。

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

正確にいうと、交渉は日米の業界代表か進めることになっている。各々の政府代表はこれを後見人として見守るというのが、双方の取り決めだった。別室には各々の事務局の要員が待機している。その人数も限られていた。産業調査員のシオリのほかに、川越参事官の姿もあった。野沢研究調査部長は業界との連絡調整の要員として別室に控えていた。

なるほど、政府系金融機関の人間ならば、錯綜する業界の連絡調整役としては、適任というべきである。特定企業の色がついた人物ではないのだから、その意味でこれはうまい人選だった。米側の事務局要員の姿がみえないのは二階の別室に控えているからだ。米側もだいたい日本側と同じような交渉団の布陣をしいているようである。

最初に切りにしたのはデビッド・ディクソン会長だった。暖炉の火が赤々と燃え盛っている方に手をかざしながらデビッド会長は静かな口調で話し出した。

「日米関係は、あまりにもこじれてしまった。これを改善するのが、今回の話合いであると、私どもは考えている。そこでここでは率直に話合い、問題の解決をはかることにしたいと思っている」

そういうと、デビッド会長はまず、クローン・コンピュータの問題や、ソフトのコピーなどの違法行為の排除や著作権の保護などで、日米が協力して実効ある効果的な措置をとることを提案した。つまりコンピュータやソフトウェアの違法なコピーを排除するため、日米が互いに脇力しようではないかというのが、デビッド会長の提案の主旨である。それは意外な提案に思えた。

確かにソフトやコンピュータの海賊版の横行は目に余るものがあった。海賊版の汚染地域に指定されたのが香港、台湾、シンガポールと韓国だった。これらの地域ではコンピュータの本体から各種のソフトまで、コピー商品が本物の五分の一から三分の一という超低価格で販売されていた。そのことで日米か協力し合うことに、日本の代表としては異存があるはずはない。坂田専務は大きくうなずき、デビッド会長の提案に同意した。デビッド会長はあくまでにこやかである。

デビッド会長は用意したペーパーにサインを求めてきた。簡単な文面で

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

ある。坂田専務は手にしたペーパーを田所官房長に示し、その上で改めて書面にサインした。こんな問題で日米がいがみ合ってきたのではない。なんだか狐につままれたような気分である。デビッド会長の表情はあくまでおだやかだ。淡々としていて、引退した実業家のような雰囲気を持つ男である。

「さあ、最初の難しい問題は解決することができました。次の問題の解決には、我々はさらに寛容と忍耐とか必要です」

終始無言を通していたウォーレン・マークラ通商担当次官が同調するようにうなずいた。これからが交渉の本番だ。坂田専務は構えるようにして、デビッド会長の方を見ている。田所官房長も緊張で躯がこわばっている。次になにが出てくるかである。しかし、互いのやりとりは、あくまで実務的だった。

「どうでしょうか、損害を与えた米側の企業に対して、日本側は三億五千万ドルの補償を行うこと、これは可能でしょうか。それが可能ならば、我々は反トラスト法違反の提訴を取り下げる用意がある」

円ドルレートが百二十円前後だから、総額で四百億円の賠償金額になる。確かに巨大な請求額だ。が、米国市場を失うことを考えれば、これは安い買物かも知れない。この調子で交渉が進めばいいのだが……田所は米側の態度が余りにも軟化していることにちょっとばかり驚いている。高いか安いか、まあ、金額はともかくとして、業界も賠償金の請求に応ずることに異論が出てくるはずもないように思える。この際は交渉の下手な駆引をするよりも、むしろこの場で決着をつけた方が得策かも知れない。坂田専務も同じことを考えていた。

ともかくその日の交渉は順調だった。日米が激しく対立してきたなどということは、まるで嘘のようである。いつもはにが虫をかみ潰したような顔をしているウォーレン・マークラ通商担当次官さえも、今日に限って上機嫌だった。

田所の胸にはどこかひっかかるものかあった。最初から交渉がこんなに順調に進むとは、考えていなかったことである。なにかおかしい……だが、これまでのところ、日本側が特別リスクを負わなければならないようなこ

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

とを約束させられたわけではない。

「まだ、幾つか協議を必要とする問題が残ってはいますが、どうでしょうか、今日はこのあたりヱ父渉を打ち切り、明日、引続き話し合うことにしたいと考えますか？」

「結構です……」

二日目の交渉も同じくワシントン郊外のひなびた別荘で行われた。顔ぶれも昨日と同じである。交渉の経過についてはそのつど、野沢が東京に連絡している。東京の業界関係者も、米側の柔軟な対応に驚いているようだった。もちろん著作権保護とコピー防止問題については、あっさりと受け入れることを決めたようである。一方、損害賠償についても提訴か取り下げられるなら、これにこしたことはないというのが、業界各社の判断だった。東京では田所官房長の人気は沸騰していた。

デビッド会長は昨日と同じく表情はにこやかである。自らコーヒーをサービスしながら、くだけた調子で冗談をいってみんなを笑わせたりしている。交渉というよりは、気のあった仲間が暖炉を囲みながら談笑にふけっているという光景だった。実に見事な演出である。

「さて、始めましょうか」

そういうと、デビッド会長は暖炉の前の椅子にゆったりと腰を降ろした。老眼鏡を掛け直しながら書類に見入る姿は、どうみても好々爺（こうこうや）という風情である。さしずめかたわらに座るウォーレン・マークラは気難しい長男という役どころである。しかし、昨日と同じように交渉がスムーズに進むかどうか、決して楽観はできそうにない。日本側代表の二人はまだ用心深く構えていた。

「半導体産業の設備投資競争はどう考えても異常です。日米に不幸な事態が

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

起こったのも実をいうと、需要サイドの現実を無視した過剰な設備投資にあるのではないか、私どもはそう判断しているのです……そこで、設備拡張競争に終止符を打つため、協力と協調の関係を作ることを、ここで提案したいと考えます」

デビッド会長はそういうと、鞄から書類を引出し、日米の年間投資額を抑制するため具体的な方策を話し始めた。

デビッド会長が示した数字では、半導体の設備投資は超集積化が進むにしたがって急速に増大、日本では年間二千億円に近い設備投資を行っているほか、米国でも年間五億七千万ドルの規模になっている。かりに１６メガビットＲＡＭの生産が本格的に軌道に乗る段階では、半導体の設備投資額はおそらく、現状の二倍から四倍の投資額になるのではないかと、デビッド会長は資料に目をとおしながらいった。

言葉のひとつひとつに説得力がある。確かに半導体企業は過剰な設備投資競争にいささかくたびれてきていることは事実である。技術革新が急テンポで進んでいること、微細加工設備の価格が次第に巨額になっていることが、その原因であった。とくに半導体では超高集積化の進むテンポかあまりにも急速であるため、またたくまに設備が陳腐化してしまうのだ。つまりライフサイクルが他の産業に比べて短いことが、半導体企業の経営を圧迫していた。モトラム社が倒産した原因もその点にあったのだ。

「国際的にみれば、おっしゃるように半導体の設備投資は確かに過剰投資の傾向か認められます。これを国際的に調整することは薗かに重要なことだろうと思います。しかし……」

坂田専務が一語一語、言葉を選ぶようにして答えた。

「しかし、とおっしゃると？」

デビッド会長のもののいい方は穏やかである。坂田専務はちょっと言葉に詰まった。デビッド会長のいっていることは、生産を抑制するためのカルテルを意味していた。問題は新規の投資額をどうやって決定するか、その仕組みを作ることだ。これは厄介な議論を呼ぶことになるのではないか……坂田の懸念はそのことにあった。

「ここで少し具体的な数字を検討してみたいと思います。日米両国の半導

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

体企業が設備拡張や設備の新設のために投じている金額は昨年の実績でみますと、ドル換算で合わせて約十二億八千五百万ドルです。これを百分率でみると米国が約四十パーセント、日本が六十パーセントの比率になっています。どうでしょうか、この数字を基礎にして、今後五年間、現状の比率で日米は投資を抑制することを提案したいと思います。もちろん、日本側にこれに代わる抑制案があれば、我々としてはそれも検討課題に含め、双方で協議したいと思いますが……」

坂田は思わず隣に座る田所の顔を見た。米側は考えている以上に柔軟というか、協調的な姿勢をみせている。よくても五十パーセント、下手すると三十パーセント程度のシェアで押し切られるのではないか、そこまで妥協しなければならないかもしれない、そう覚悟を決めていた。それが現状を基準にして、将来の投資額を決定しようではないか、そう提案しているのである。田所は満足そうにうなずいている。

どうも米側はうす気味悪いほど、柔軟な態度である。やはり米国は日本を重要なパートナーと考えているということだろうか。そうだとすれば、ここで日本側が出すべき結論は決まりきっている。だが、どうも話がうま過ぎる。

「少し事務局と打ち合せをしておきたいので、ここで暫く休憩をとることをお許しいただきたい。そうですね、三十分もあれば充分だと思いますが……」

「結構でしょう……」

デビッド会長か鷹揚にうなずいてみせた。

庭園に面した客間が日本側代表の控え室にあてられていた。木目（もくめ）が浮き出た清潔な客間には、暖炉の火が赤々と燃え盛っている。事務局の全員……といってもシオリのほかには川越参事官と東洋経済研究所の野沢研究調査部長がいるのみである。全員が緊張して坂田専務理事の方を見ている。

田所官房長は窓際にたち、庭園の冬景色に見とれている。庭園の中央に見える温室には真っ赤な冬薔薇が咲き誇っている。坂田専務が簡単に米側の提案した内容を説明した。

話ができ過ぎている。坂田専務理事の話をききながらシオリはそう思っ

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

た。生産調整ということには、少しばかり引っかかりを感じないではないが、日本側にとって特段、不利になるような材料は見あたらないように思える。むしろ米側が設備投資を今後五年開、相対とはいえシェア四十パーセント程度で満足できるのか、そのことの方が心配になるぐらいだ。日本を排斥することに血道をあげていた米側が、そこまで譲歩するとは……確かに考えられないことだ。米目の真意がどこにあるのか、シオリには疑問に思える。

ただ、この場の雰囲気からいって、疑義を差し挟むことはできそうにない。シオリは、沸き上がる疑念を胸の内に押しこめながら、この場合、チェンバレンだったらどう判断するか、そのことを考えていた。

「受諾しよう……！」　窓際に立つ田所官房長がいった。全員が大きくうなずいた。

野沢はポータブル型のパーソナル・コンピュータを電話回線につなぐと、大急ぎで計算式を打ちこみ、投資額と半導体生産の相関を時系列でみるとどうなるか、シミュレーションを始めた。ポークブル・パソコンは大型コンピュータにアクセスしている。計算の結果、日本側は充分競争力を確保できるだけでなく、米国との競争では優位に展開できるという数字が出てきた。液晶のディスプレーに映し出されたグラフをのぞきこみ、田所官房長は満足そうに幾度もうなずいた。

東京では電子工業界の会談室に業界の代表たちが交渉結果を聞くため、全員が待機していた。野沢は受話器を取り上げると、弾んだ声で東京を呼び出した。予想したように東京では、交渉か成功のうちに進んでいることに沸き立っていた。

「東京も異存がないようです」

「そうか。これで決まった」　田所はそう短くいうと、米国代表団が待っている二階の部屋に向かって歩き出した。デビッド会長は愛想よく日本側代表の二人を部屋に迎え入れた。

続いてデビッド会長は研究開発費の抑制について、話し始めた。際限のない研究開発投資の負担、それが半導体企業の経営をいかに圧迫しているかを強調した上で、研究開発投資に関する協定と研究ターゲットに関する

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

二つの協定の締結を提案してきた。

さすがにこれは、予想していなかった提案たった。デビッド会長の口元には相変わらず人の良さそうな笑いがこぼれている。

「研究開発自体を抑制してしまおうということですか？」

「わかりやすくいえば、そういうことになりますかね。ここで留意していただきたいことは研究開発競争はエンドレス・ゲームだということです。我々は既に４メガビットＲＡＭの半導体を生産ラインに乗せることに成功しているが、まもなく１６メガビットＲＡＭが生産ラインに乗るはずです。さらに３２メガビットＲＡＭも生産ラインに乗るのも時間の問題です。我々はまるで螺旋（らせん）階段を登るようにいつまでも同じようなことをやっている。これでは互いに疲弊（ひへい）するだけです」

デビッド会長の提案は簡単明瞭で、まず第一に設備投資抑制協定と同じように、日米の現状の研究投資額を基礎におき、これをシェアリングしようという考えである。

困ったことに研究開発では、米国の方が圧倒的に投資規模が大きいのだ。設備投資協定と同様に、現状を固定する方式で研究投資韻をシェアリングすることになれば、日米の比率は八対二と大きな差が出てしまう。米側は当然軍事用の研究開発費を含めて基礎になる数字をはじき出すことが考えられるからだ。当然ながらこれを受け入れるわけにはいかない。

坂田専務理事は反論を試みた。そしてデビッド会長はあっさりと、坂田専務理事の反論を受け入れた。表情はあくまで、にこやかだった。

そこで再び日本側は休憩を申し入れた。交渉は最終局面を迎えている。ここで話がこじれると、まとまる話もまとまらなくなる。それに業界から交渉の全権を委任されているとはいっても、ことは研究開発にかかわる問題である。これは半導体企業にとって死活的な意味を持っている。もう一度東京の意向を確かめておく必要かある。そう判断して休憩を申し入れたのだ。

連結調整にあたっている野沢が米側の提案主旨を電話で東京に伝えた。東京でも多少議論を呼んでいるらしく、野沢は受話器を握ったまま暫く待たされた。長い時間のように思えたが、待たされたのはせいぜい二十分程

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

度であったか。田所官房長は部屋のなかをせわしなく動きまわっている。
「反対の意見が出ているようです」
「どこかね……？」
「日興製作所のようですが」
「日興製作所か……！」
田所官房長は吐きすてるようにいった。
「反対は一社かね」
「そのようです。ただ、東京は交渉の全権を委任しているので、決断は交渉団に任せるというのが大勢的な意見のようです」
「大勢的な意見……？　そうすると、交渉を一任する、そのことに反対意見かあるということだね」
田所はいかにも心外だという顔をした。
「日興製作所だけのようですが……」
日興製作所ならば、いつものことだ。まあ、日興製作所だけならば、気にすることはないだろう……田所は米側の提案を受け入れる腹を決めた。問題は日本の投資比率をもう少し引き上げることを、再回される交渉で粘ってみることだ。
交渉は一時間の休憩をとったのち、再開された。
「わかりました。それではこの場合、日米はヒフティ・ヒフティの比率にしましょう。それならば、異存はないですね」
デビッド会長は日本側の申し入れをあっさり受け入れた。坂田専務理事も拍子抜けしたようである。どう考えても、米側は大幅な譲歩をしたことになる。こうなると、日本側の主張が全面的に通ったことになる。
これまでの騒ぎはなんだったのか。今度の交渉は難しい交渉になりそうだと、極度に緊張して交渉に臨んだだけに、こうなると日本側代表の二人は肩すかしをくわされたような気分になってくる。しかし、なにかあるのではないか。疑心暗鬼になるのも無理からぬことだった。交渉相手としては最も手ごわいと思われていたウォーレン・マークラさえも、今日に限ってにこやかな顔をかくそうともしない。
「ところで、これは最後の提案になりますか、３２メガビットから上の半

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

導体の研究開発は、ここ二年間凍結することを提案しますが、異存はございませんね」

デビッド会長はさらりといった。この場合は一方的凍結了はなく、両者が同時に研究開発を凍結するという提案だった。半導体をこれ以上、超高集積化してみたところで、実際のところたいした需要が期待できるわけではない。それがデビッド会長があげた研究開発を凍結させる理由だった。また、それによって、半導体企業間の研究開発に対する無駄な重複投資を止めようではないか、ともデビッド会長はいった。

日本側の代表にもデピッド会長がいわんとしていることは理解できる。問題は規制を受ける対象品目をどう絞りこんでいくかだ。とくに量産形のチップだけを規制対象とされると、日本側は不利になる。この場合、米国が得意としている論理集積回路も規制対象に合まれるかどうかだ。

「当然、それも含んでいなければ、協定を結ぶ意味はありません。協定は一方のみの犠牲の上に成立するとは、我々は考えていません。痛みも喜びも、互いにわかちあう関係を作ること、我々は今回の協定の意義をそのようにとらえているのです」

デビッド会長が答えた。

「しかし、第三国が３２メガビットＲＡＭを生産することだって、可能性としては否定できない。仮にそういうことになれば、日米は大きな遅れをとってしまう……」

そう坂田専務が疑義を挟んだ。

「そうでしょうか。３２メガビットＲＡＭは、ご承知のように現在の半導体の延長にあるのではなく、従来の半導体とは概念的にも、素材としても、まったく別な次元にある素子です。この分野で、もっとも研究問発が進んでいるのは日米両国であり、第三国の半導体企業が、その日米両国を追い抜くことができるでしょうか」

現状は確かにそのとおりかもしれない。しかし、ヨーロッパをこの協定に加えないことは、協定そのものの意味をなくしてしまうのではないか。この協定を日米両国だけで調印することに日本側は不安を覚えた。協定には欧州の半導体企業も参加させるべきだ、と主張したのである。しかし、

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

そのことだけは、特に理由をあげるわけでもないが、デビッド会長は強硬に譲らなかった。これだけは絶対に譲れない……デビッド会長は強硬に主張した。協定全体の中身からいえば、米側が大きく譲歩する形になっている。ここは日本が譲歩する番ではないか、坂田専務理事はそう考えた。

「わかりました」

そういうと、坂田専務理事はデビッド会長に握手を求めた。日米秘密交渉はこうして妥結した。まさしく感激の瞬開だった。田所官房長も上気した顔で何度もうなずいていた。

5

「東洋電気の米国総支配人の真野さん、今朝釈放されたみたいね」

と理恵がいった。

「告訴を取り下げること、それは日米秘密協定の約束だから……」

シオリが答えた。

「これでハーッピーエンドだなんて、とても信じられない。どう考えても裏があるような気かしてならないわ」

一泊三百ドルもするというのに、殺風景なホテルの部屋だった。裕美は日米交渉が呆気(あっけ)ない終わりかたをしたことに、疑問をいだいているようで、先ほどからシオリに対して攻撃的な口調であれこれいい立てていた。シオリはスコッチの水割りを口に運びなから裕美の話を聞いている。

チェンバレンも協定の調印には法律顧問の立場としては賛成できない、と裕美と同じようなことをいっていた。

第一に上げた疑問は、日木を叩くことにあれほど強硬な態度をとっていた彼らが、理由もなく日本と妥協をはかるようなことをするだろうか。第二の疑問は技術革新の激しい半導体の分野で技術開発投資を抑制する協定を締結したことである。この協定はヨーロッパが除かれていること、また、戦略国家である米国がソ連との関係で、軍事戦略の足枷(あしかせ)となるような協定を締結すること自体が疑問なのではないか。

トップ会談での合意を受け、事務局はさっそく協定の詳細を検討する作

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

業を始めた。その過程で、幾つも疑問が出てきた。当然のことだったが、激しい議論を呼んだ。

協定文の付属文書には軍事戦略条項を別途設定し、国防総省が関係する技術開発について、また、国家プロジェクトについては、この協定の拘束（こうそく）を受けるものではない、確かにそう書いてあった。つまり安全保障条項が盛りこまれ、これは協定によって軍事上の研究活動を制限されるものではないと、明確化されていた。

チェンバレンも顧問弁護士の立場で、議論に参加した。チェンバレンは、たとえ協定ができたとしても、このような特例事項がある協定では、有名無実となる恐れがある、調印には慎重になるべきだと、主張した。シオリも同じ意見を、くりかえし主張した。

会議の最終局面では、大使館の担当官も議論に加わった。最終局面での会議の場は、チェンバレンに同調するシオリら反対派と、田所官房長の意向を汲み協定の受け入れを積極的に主張する川越参事官など、協定批准派の二つに分かれた。チェンバレンは協定案文の矛盾を突き、もう少し時間をかけて、結論を出すべきだと、熱っぽく語りかけた。

だが、結局、チェンバレンの差し挟んだ疑問は田所官房長の「問題はない」の一言で簡単にかたづけられてしまった。チェンバレンとシオリは完全に孤立してしまった。

挙句のはてにチェンバレンは法律顧問の地位を解任された。契約期間か切れたというのが、その理由だった。だか、シオリにはその本当の理由がわかっている。日米関係を無用に挑発している……やはりチェンバレンは疑われていたのだ。協定の締結に消極的反対論を唱えたシオリさえも、疑惑の目で見られているような雰囲気である。しかし、チェンバレンもシオリ自身も、主張すべきは主張した。悔（く）いが残るようなことはない。

田所官房長の説明を聞く限りでは、日本側にすれば特別リスクを負わされたようなことはないわけで、交渉は完全に日本側の勝利に終ったことになる。協定の表面を読む限りではそのとおりである。しかし、果してあれでよかったのか。シオリはチェンバレンが提起した協定に対する疑義に、今でも拘（こだわ）りを持っている。だが、交渉を進めた当事者も東京で事態の成行

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

きを注視していた業界関係者も挙げて、協定の成立を歓迎していた。呆気ない幕切れである。

その呆気なさに裕美は、疑問を差し挟んでいるのだった。シオリも裕美がいっていることは充分にわかっている。が、すでに結論が出た問題である。あれこれいってみたところで仕方のないことだった。裕美は相手が沈黙を決めこむと激昂する質である。ベッドの端に腰を降ろしている理恵か、裕美の無神経なもののいい方をたしなめるようにして、かたわらから口を挟んだ。

「まあ、ともかく終った……」

理恵かそういいかけたとき、ナイトテーブルの上にある電話が鳴った。理恵が立ち上がり、受話器を握った。理恵は片目をつぶり二人にウインクを送ってみせると、電話の相手と小声で受け答えをしている。電話はロサンゼルスに戻っている佐瀬からだった。電話はすぐに終わった。理恵は渋い顔をして、自分の椅子に戻った。

「また、厄介なことか起こったみたい」

「厄介なことって？」

怪訝そうな顔をしてシオリが聞いた。

「日興製作所の例のシンクタンク計画に国防総省が中止を勧告してきたらしいの。それに……」

「それに……？」

「日興竪作所に対して、銀行団が融資打ち切りを通告してきたらしいわ……これは報復ね」

日興製作所が協定の締結に最後まで反対して協定に著名することを拒否していることはシオリも知っている。理恵がいった報復とは、そうしたかたくなな態度をとり続けている日興製作所に対する制裁ということを意味している。

これか理恵がいうような〈報復借置〉だとすれば、日興製作所は今後、どう対応するのか。国防総省の計画中止勧告にしても銀行団の融資打ち切りにしても、日興製作所に対する〈制裁措置〉はほんの手始めに過ぎないように思える。彼らのことだから、次々に日興製作所を締め上げる手だて

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

を考えているに違いない。

日興製作所は果して半導体カルテルから除外されて、この世界で生きていく目算があるのか。米国の電子工学の権威者たちを結集した、あの雄大なシンクタンク構想は結局、潰されてしまう運命にあるのだろうか。なぜだか、あの佐瀬には頑張って欲しい、という気持ちかシオリにはある。

「そう、頑張ってもらわなくては……」

裕美には珍しく、ひどく感傷的ないい方をした。シオリが大きくうなずいている。

裕美は明日早朝、東京に戻ることになっている。事件に深入りし過ぎたため、書けないことだらけになってしまった、と裕美はこぼしている。

それはシオリのせいではないことはわかっているのだが、裕美がシオリに対してひどく攻撃的になっているのは、協定に対する疑念かどうしても、払拭できないからだった。

「で、理恵はどうするの……」

裕美か聞いた。

「まだ、仕事が残っているわ」

「そう……」

実際、理恵には仕事が残っていた。包括協定が成立したからといって、これですべてが終ったわけではないのだ。まだ、付属文書の細目を詰める日米の実務レベルの交渉が残っている。野沢研究調査部長は協定の細目をにめる仕事を継続して進めていたが、設備投資額や研究投資額を決定するためのデータの整理や年度毎の投資額を決める積算作業などを理恵は手伝わされていた。単調だが、煩雑で手間ひまのかかる作業だった。

幸い気心の知れたシオリがいるので、面倒なことが起こってもなにかと心強い。しかし、理恵も付属文書として残されることになっている細目協定の中身を読めば読むほど、裕美と同じように協定に対する疑問か出てくる。そのことをめぐってシオリと何度も議論をしたことかあるが、協定を受け入れることを最終決定した以上は、シオリとてもいかんともしがたいことだった。

日興製作所だけか、いまだに頑張り続けている。理恵もシオリにも、そ

Strategy Management Consulting, Inc. All Rights Reserved

のことが唯一の救いのように思える。佐瀬は苦しい闘いを続けているようだ、東京本社では、役員のほとんどか協定を受け入れたらどうか、そういう方向に流れているようだったが、佐瀬はいったん帰国し、流れを食い止めるため、必死の説得を続けて帰ってきたばかりである。昨夜の電話だと、ロサンゼルスに戻ったのは一昨日のことのようだった。

理恵は佐瀬に協定の付属文書の中身を流し続けていた。シオリはそのことに気がついているようだったが、黙認する態度をとっていた。信条としては日興製作所を支援したいという気持ちがあったからだ。

協定を受け入れた企業は結局、米国の軍門に降ることになるのではないか、チェンバレンは不気味な予測を立てていた。そうなるかどうかは別にしても、研究開発条項だけはどうしても協定から外しておきたかった。

翌朝、二人は裕美をダレス国際空港まで見送った。早春というにはまだ冷え冷えとしている広い公園のなかを矢のように駆け抜ける牡鹿の姿があった。あの二人組の男たちはどうしたのだろうか。姿を見せなくなって久しいような気もする。いや、そうではなくついこの問まで、うるさく付きまとっていたような気もする。裕美が笑いながらそんなことをいった。

「うん、私を監視する意味がなくなったんじゃないかしら……私も明日から産業調査員の肩書が外れることだし」

「ええっ、それほんと？」

「昨日、内示か出てね。転出先はある財団の企画課長ということなの……まあ、花の産業調査員もこれで気が楽になるわ」

シオリはハンドルを握りながらせいせいしたように笑った。明らかに降格人事である。

ダレス国際空港のターミナルビルが視野に入ってきた。

（つづく）